

第 17 回「日本医療マネジメント学会学術総会」 シンポジウム「薬剤師の病棟常駐による成果と展望」

2015/6/15

6月12・13日に大阪府大阪市で開催された第17回日本医療マネジメント学会学術総会で「薬剤師の病棟常駐による成果と展望～真のチーム医療の担い手として～」(座長：堀内龍也・日本病院薬剤師会顧問、林昌洋・虎の門病院薬剤部長)と題したシンポジウムが行われた。演者は座長を務める林昌洋氏の他、渡邊幸子氏(医療法人橘会東住吉森本病院医療安全管理部部长)、高橋弘枝氏(独立行政法人地域医療機能推進機構本部企画経営部医療副部长・看護担当)、有賀徹氏(昭和大学病院病院長)、花井十伍氏(全国薬害被害者団体連絡協議会代表世話人)の5名。各演者が薬剤師、看護師、医師、患者というそれぞれの立場から薬剤師の病棟常駐による成果と展望について語った。

■薬剤の専門的知識による医療安全への貢献を

林氏は病棟薬剤師に求められる役割の変遷を踏まえ、虎の門病院におけるこれまでの取り組みについて報告した。同院では全病棟に薬剤師が常駐して持参薬確認と入院中の処方設計を分担している他、近年ではアレルギー歴抽出ツールを使用して被疑薬を特定し、電子カルテに“処方ロック”を掛ける役割を担っている。アレルギーを持つ患者に副作用を及ぼす可能性がある薬剤が投与されることがないように、薬剤師がシステム上でロックを掛けることで、患者の安全を担保する仕組みだ。「薬剤師が関わったことにより、処方ロックされる件数は8倍近くにまで増え、重篤なアレルギー症状を引き起こすケースはなくなった」とその成果を強調した。

渡邊氏は東住吉森本病院で20年間にわたり継続されてきた病棟薬剤業務における取り組みを発表した。同院では限られた人員の中、1病棟ずつ段階的に病棟滞在時間を増やし、薬剤師が入院患者とシームレスに関わる体制を構築。他職種と情報を共有することにより、薬剤師が医療安全の質向上に貢献している。また高橋氏は看護師の立場から「インシデントの発見など、医療安全における薬剤師の貢献は大きい」と述べた他、医師である有賀氏も「病棟は患者さんにとって自宅に戻るための準備をする場所。円滑な流れをつくるためには専門性の高い薬剤師の介入によって医療安全の質を向上させることが重要」と指摘した。一方で花井氏は「入院中に薬剤師の姿を見かけることはほとんどなかった」と患者としての体験談を交えながら「より患者に近い場所で適切な処方設計に資する活動を期待したい」と語った。

■薬剤師不足をどう乗り切るかも今後の課題

口演後の質疑では会場の参加者から「地方の病院では薬剤師を採用することが難しい」といった声が聞かれた。林氏は「募集要項に専門資格などを記載して求めている薬剤師像を明確に打ち出し、日本病院薬剤師会のサイトなどを活用してマッチングしてみてもどうか」と提案。また堀内氏は「国家試験の合格率の低迷に加え、人員の地域偏在が顕著であり、これらの改善は今後の課題」と述べた。